

**第6回エコエリアやまがた推進コンクール
優秀賞（エコエリアやまがた推進協議会長賞）**
※掲載している情報は平成23年度時点のものです。

名 称	大江茄子部会（JA さがえ西村山）
所在地	大江町

1. 取組の背景・経過等

大江町は、果樹（りんご、西洋なし）と水稻の複合経営が主であり、夏期の労働力活用が課題となっていたことから、安定して長期間栽培でき、継続的に収入が得られるナスに注目し、ナスの栽培は平成11年に5名で大江茄子研究会を組織し、生産をスタートした。

品種は色が濃く、ツヤがある“くろべえ”を統一品種とした。くろべえはやや皮が固めで漬物用には向かないが、肉質は柔らかく、煮ナス、焼きナスには相性が良い。

また、量販店では、棚持ちが良いと反応も良好だった。

生産者、普及課、JAが栽培法を模索しながらも、初年度から10a平均100万円ほどの売り上げになり、予想以上の成果を上げた。

結果、大きな設備投資もなく、重量も軽いため、気負いせずに栽培を始められることもあり、生産者は翌年から増え続け、平成14年度には生産者24名による大江茄子部会に発展した。

現在は西村山全体に会員数が増え、現在の会員数は61名で総面積は8haになっている。



2. 農業経営・技術と取組姿勢

(1) 環境に配慮した農業技術の実践と工夫

ア) 部会統一肥料による有機質肥料の施用

基肥に植物性有機質を40%含んだJAさがえ西村山オリジナル肥料のフレッシュいきいき（20kg規格）を5袋施用し、化学肥料の施用を節減した。

イ) 減化学農薬の取組み

連作障害の対策として、土壌消毒を行わず、輪作や土壌改良剤（有機微生物菌）を施用し、障害を抑制している。

また、慣行の防除基準から絞り込み、大江茄子部会の防除暦を作成し、使用農薬を統一し、生産履歴の記帳と管理を行っている。

さらに、防除適期には集荷場にて速報を配布し、無駄のない防除と農薬回数の削減に努めている。

(2) 家畜排せつ物、稲わら、食品残さ、農業用使用済プラスチック等のリサイクル利用の実践と工夫

「自分たちが納得した堆肥を全員で使おう！」ということが組織決定され、県内で供給されている堆肥について検討を行い、花芽の充実が期待できるリン酸分が多いこと、土作り効果が高いことなどを考慮して、完熟堆肥を用いることとし、また、生産者自らが、堆肥を製造している現場の視察まで行い、全員が納得してから使用している。さらに、これらの堆肥を効率的に使用するために、毎年施肥研修会を開催し、技術研鑽を図っている。

なお、平成23年度より、朝日堆肥センターが製造した牛糞堆肥を10a当たり2トン施用

し、良質な土壌作りを行っている。

(3) 温室効果ガスの排出の抑制、生物多様性の保全等を含む先進的な環境保全型の農法を 実践・工夫

ア) 二重被覆によるハウス栽培

ハウス栽培において加温せず二重被覆をし、10月下旬まで良品質なナスを生産出荷している。

イ) 角材による支柱利用

支柱は鉄パイプによるものが一般的だが、半数ほどの栽培者が地元の製材所から余った角材を格安で譲り受け支柱として利用し、廃棄物の有効利用とコストの節減に努めている。



(4) 持続的な環境保全型農業の実践と経営確立

平成14年の部会設立当初から部員加入にはエコファーマーの認定を受けるという要件を入れており、全員がエコファーマーになっている。

このことが、販売面での大きなPRポイントとなり、生活クラブ生協との契約や量販店との契約販売など相対取引が増加し、高値取引の原動力となっている。

なお、生協への契約販売を行っているため、①除草剤は使用しないこと。②使用する農薬は事前に申請すること、などを厳守するひつようがあり、大江茄子部会は、一般的なエコファーマーよりもさらに厳しい基準で栽培に取り組んでいる集団といえる。

また、転作としてナス栽培を奨励しており、水稻、なす、果樹(りんご、ラフランス)の地域の特色を生かした農業経営の流れが明確になっている。

3. 周辺等への影響力・普及力

(1) 創造性・地域的な影響力

部会員は新規栽培者から高齢者まで年齢層が幅広い。

要因としては、仕事を退職され、新規に農業を始めた方でも大きな投資の必要がないため、1年目から黒字になり、長く続けられることが大きい。

また果樹栽培を続けるには体力的にきつい高齢者であっても重量が軽く手入れもしやすいことも大きな要因である。

今では、新規品目としてばかりでなく、高齢者にも、大江町全体にも農業活性化をもたらす原動力となっている。

(2) 消費者等との交流、食農教育・環境教育への参画等を通じて消費者等の環境保全型農業 に対する理解と関心の増進に貢献

大江茄子部会では9月6日をくろべえの日とし、大江町の特産品として、町民に浸透してもらうため、毎年大江町の全小学校へくろべえなすを寄贈し、茄子部会役員がくろべえの特徴や栽培の仕方などを説明し、会食する取組みを行っている。

また、近年西村山全域に栽培者が増えたことにより、22年度より、全西村山の小学校へくろべえなすを寄贈している。(22年度は約350kg寄贈)

(3) 地域の農業資源保全と活性化

新規栽培者の加入が多いのもあり、遊休農地等を有効に利用した栽培も多い。

4. その他特記事項

(1) 経営上の特徴

- ・西村山全域で8haの作付があるが、一部の地域では1haの団地化を行い、作業の共同化に取り組んでいる。
- ・JA産直施設で1日約200袋を販売しており、地産地消に取り組んでいる。

5. 取組の成果と展望

平成11年に5人から始まった大江茄子部会が12年間で61名、西村山全域に生産者が増えた。新規就農者から高齢者まで栽培しやすいことや夏から秋の収入の確保に安定した実績を積み重ねることで生産者の増加につながった。

今後も積極的な部会員の加入と遊休農地等を有効利用できるよう、推進していきたい。

